

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	松本 理沙
論文題目	1970年代から90年代のアメリカにおけるパブリック・アート研究——批評と作品の分析を通して		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、一九七〇年代から九〇年代のパブリック・アートの美術史上の位置づけとその独自性を明らかにするものである。先行研究において、アメリカのパブリック・アートは、今日隆盛するコミュニティ密着型アートの先駆けとして理解され、パブリック・アートを論じた八〇年代末から九〇年代半ばにかけての批評もまた、そうした文脈に位置づけられてきた。しかしながら、七〇年代から九〇年代のパブリック・アートシーンを仔細に検討すると、そのような見方に適合しない批評や作品の存在が浮かび上がる。本論文では、この点について考察するため、批評と作品双方の分析を行った。</p> <p>まず第一章では、八〇年代のパブリック・アート批評が、「現象学的」な性質を持つパブリック・アートを評価しており、その後に登場するパブリック・アート批評とは異なる性格を持つことを明らかにした。続いて、八〇年代末から九〇年代半ばのパブリック・アート批評は、作品と関係する社会的文脈に目を向け、マイノリティを包摂した「パブリック」概念を再構築することを目的としていたことを詳らかにした。以上の考察をもとに、第二章以降では、八〇年代末から九〇年代半ばにかけてのパブリック・アート批評が論じた六作品を三種類に分類して論じた。</p> <p>第二章と第三章で取り上げた作品はいずれも、八〇年代の批評では現象学的な観点から、八〇年代末から九〇年代半ばにかけての批評では土地再生プロジェクトや公園、モニュメントとしての機能から評価された経緯を持つ。</p> <p>第二章ではロバート・モリスの《グランドラピッズ・プロジェクト》を分析し、確かに本作品は土地再生プロジェクトとして建設されているものの、その負の側面に対してモリスは自覚的ではなかったことを明らかにした。モリスは、自身の造形的関心である現象学的な側面から作品を制作していたのである。</p> <p>第三章ではナンシー・ホルトの《暗黒星の公園》を分析し、本作品は公園やモニュメントとしての機能を持つ一方で、マイノリティを包摂するという目的を持つものではないことを明らかにした。またそれは、天体と連動することによって、人間的な時間感覚を越えた時間を体験する作品でもあることも示された。</p> <p>以上、第二章、第三章における考察から、両作品が現象学的な体験の創出に寄与しているという点において、八〇年代の批評の内容と齟齬がないことが確認された。しかし、これらの作品において、八〇年代末から九〇年代半ばのパブリック・アート批評が論じるような、社会的文脈への意識は十分に醸成されていなかったこともまた明らかになった。</p> <p>第四章および第五章前半では、コミュニティ密着型のパブリック・アートとして知ら</p>			

れる作品を取り上げた。第四章では、ジュディス・バカの《ロサンゼルス of 偉大な壁》を取り上げ、本作品が、チカーナ壁画として制作されることによって、それをグラフィティと差別化し、マジョリティが覇権を握るパブリックな権力構造に参加することを目的としていたことを明らかにした。

第五章では、グループ・マテリアルの「人々の選択」展について考察を行うことで、彼らの活動において、ラティーノ・コミュニティがラディカルな政治性を担保する役割を果たしていたことを明らかにした。しかしそれゆえに、芸術家が定めた条件から逸脱する特徴は捨象され、コミュニティの人々は同質的な特徴によって理解されることとなる。

第四章、第五章における考察から、先行研究が論じた通り、この時期のパブリック・アートにも、コミュニティとの協働を行う作品が確かに存在することが明らかになった。しかし、第四章の考察から、そのような作品であったとしても、「パブリック」性への関心が先行していることが示された。加えて、第五章前半の考察から、コミュニティとの関係を構築するパブリック・アートに潜む問題も明らかになった。

第五章後半および第六章では、第五章前半で明らかになった問題を念頭に置き、マイノリティと協働するような、アクティヴィズム的性質を持つ作品の考察を行った。第五章後半では、グループ・マテリアルの《DA ZI BAOS》を考察対象とし、この作品が、公共空間を様々な思想を持った人々が共存する空間として捉えていることを明らかにした。第六章では、クシシュトフ・ヴォディチコ《ホームレス・ヴィークル》を分析し、この作品が、ホームレスという特定の集団だけでなく、権力やホームレスをサポートする組織、街行く人々との関係など、ホームレス以外の組織や人々との関係性を反映させたものでもあることを明らかにした。

以上の考察から、上記のパブリック・アートにおける「パブリック」概念が、マイノリティだけでなく、権力構造や彼らをサポートする組織など、マイノリティ以外の組織や人々との関係をも内包するものであることが示された。この「パブリック」概念は、マイノリティと様々な人・組織との多様な関係性を許容することによって、コミュニティ密着型のパブリック・アートが持つ問題を解消しうるものである。

以上の考察から、まず、この時期のパブリック・アート批評は、現象学的な作品解釈から社会的文脈を重視する作品解釈へと、対象の論じ方を転換させたという意味において、今日隆盛するソーシャリー・エンゲイジド・アートやコミュニティ密着型アートへとつながる礎を築いたことが明らかになった。一方で、当時のパブリック・アート批評は、コミュニティというよりも、むしろパブリックという概念から、社会的転回を推進していたこともわかった。したがって、一九八〇年代末から九〇年代半ばにかけてのパブリック・アート批評は、今日のソーシャリー・エンゲイジド・アートやコミュニティ密着型アートの研究につながる先駆的位置づけを持ちながらも、その枠組みに留まらない独自性を有していたと結論付けられる。

(論文審査の結果の要旨)

一九九八年に発表されたニコラ・ブリオーの『関係性の美学』は、九〇年代以降増加するようになる鑑賞者参加型アートを「関係性」という概念によって論じ、アートワールドに大きな反響を引き起こした。また、このいわゆる「リレーショナル・アート」と外延を同じくしつつも、より社会的関与に重点を置く芸術を指すものとして「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」という言葉も広く普及するようになった。

本論文は、こうした九〇年代以降に登場した社会的・政治的な志向性を強く有する現代美術の起源に七〇年代～九〇年代のアメリカにおけるパブリック・アートシーンの存在があるという仮説に基づき、同時代の作品および批評を再考するものである。とりわけ八〇年代末から九〇年代半ばにかけては、複数の批評家や美術史家によってパブリック・アートと政治との関連を論じる批評や研究の発表が相次いだ時期にあたる。それらの批評や研究は総じて、パブリック・アートが従来想定してきた受容層から、ホームレス、LGBTQ、先住民族や移民といったマイノリティが排除されてきたことを批判し、それに対して、これらマイノリティを主題とするパブリック・アートを「ニュー・ジャンル・パブリック・アート」と称して積極的に評価した。言い換えれば、それ以前のパブリック・アート批評が、空間や観客を「現象学的」に捉える作品を評価していたのに対し、この時期のパブリック・アート批評は、この空間や観客を社会的、政治的次元で捉える作品を評価するようになったのである。

先行研究はこうした変化を、パブリック・アートにおける「コミュニティ」への関心の高まりとして捉えてきた。たとえばミウォン・クォンは、場の物質的＝身体的側面を重視するサイト・スペシフィックな作品から、場やそこに住む人々を社会的、政治的コンテクストから眺めるコミュニティ密着型アートへの移行を指摘しているし、グラント・ケスターもまた、パブリック・アートの歴史に、公的機関によって管理される初期のモデルからコミュニティ密着型のモデルへという変化を見ている。これらの先行研究では、コミュニティという観点から、パブリック・アートとソーシャリー・エンゲイジド・アートの連続性が指摘されてもいる。

それに対して著者は、この時期のパブリック・アート批評や、それらが対象としたパブリック・アートが、コミュニティとの関係性の強化を第一の目的としていたかのような先行研究の主張に疑問を呈する。著者によれば、この時期の批評および作品が問うていたのは、「コミュニティ」というよりもむしろ「パブリック」をめぐる問題であり、「コミュニティ」への志向は、あくまでそうした問いかけから生じたものの帰結の一つであったという。また、この時期の批評が扱った作品のうちには、コミュニティ密着型アートの範疇におさまらない実践が数多く存在した。こうして著者は、この時期のパブリック・アートと批評をコミュニティ密着型アートへの「発展」の途上としてしか解釈していない先行研究を批判するのである。

本論文の重要な意義は、こうした従来説に対して有効なオルタナティブを提示しえた点にある。すなわち本論文は、パブリック・アートにおける「社会的転回」の様相

を丁寧検討しなおすことで、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの基盤となりえたようなパブリック・アートの特徴を明らかにする一方で、九〇年代以降に隆盛するコミュニティ密着型アートの萌芽としての位置づけしか見いだされてこなかったパブリック・アートの、アメリカ美術史における独自の位置づけを提示した。また、そうした全体的な達成に加えて本論文は、各章が個別の作家論としても新知見を提示しているという点において、取り上げられた個々の作家の研究史にも重要な貢献をなすものと評価することができる。

もちろん、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの起源を明らかにするには、アメリカの検討のみでは不十分である。まず、そのもう一つの中心地と目されるヨーロッパについて検討する必要があるだろう。加えて、ラテンアメリカ、アジア、アフリカなどの非西洋圏では、アメリカやヨーロッパからの影響と、個々の文化圏での文脈が複雑に絡み合っている。これらの地域では、いかなる時期に、いかなる地域からの影響が作用したのか、注意深く解きほぐす必要がある。ただ、こうした課題は著者も認識しており、今後の発展可能性についても本論文から十分うかがえた。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降